

現代中国語のカタカナ発音表記法、

あるいは文化的雪かきについて

池田 巧

二〇〇九年一月二四日(土)に北海道大学で開催された日本中国語学会第五九回全国大会のポスターセッションにて「現代中国語カタカナ発音表記法試案」と題する発表をしました。この表記法は、中国語学習の初期段階で、まだピンインに習熟していないひとのために、中国語音の特徴と区別を可能な限りの確かかつ適切にカタカナで表記し分けて、学習の補助とすることを目的に設計しました。すでにこれまでアルク、三省堂、白水社から出版した中国語関連の拙著において使用し、工夫を重ねてきたものです。そのときに掲示した音節表を、便宜的に第一表「学習用〈精密表記〉」と呼ぶことにします。

第一表の作成にあたっては、中国語を知っている読者、あるいは中国語学習者が見たときに「どのような中国語音を表記しようとしているのか」そして「どのような中国語音の違いを区別して表記しようとしているのか」が容易に把握できると同時に「ピンインの綴りが想起できる」ことまで配慮しました。もちろん細かな音の表記をするには、限られた数のカタカナの組み合わせでは限界があります。そこでデイやテイに使われる小文字の母音カナを「アイウエオ」すべてに拡張し、ヂとヅを積極的に利用するいつぱうで、濫用されがちな「長音引き」を、zhi/chī/shī/rī / zī / cī / sī の表記に限定使用する方針を採りました。

とはいえ、カタカナで中国語音のあらゆる区別をそのまま表記し分けることはできませんから、意図的に日本語音の区別で代用したり、カナの組み合わせで表現している部分もあります。表記全体に関わる大きな措置では「1」中国語の有気音と無気音の区別を清音カナと濁点付きのカナで表記し分けた「2」音節末のnとngの区別は、主母音の音色の違いを利用して表記し分けた、という二点があります。音節末のnとngは、どちらもnで区別しませんが、ngの前では母音が奥よりの深い音色に発音されることから、カタカナ表記ではnの直前に母音カナが見えれば、ngを表していることがわかります。たとえば、産 チャンに

対して、張、ヂャアン、寛、クワンに
対して、広、グアン、といった具合です。
韻母「*ong*」は母音カナが見えないように
「ワン」と表記しました。

また舌面音に *i* 介音が接続する音を
拗音で表記してしまつと、いくつもの音
節の区別がつかなくなつてしまいます。
zhao / chao および jiao / qiao は、前者
をヂャオ / チャオ、後者をジァオ / チァ
オと、日本語で読んでもより中国語音
に近く、はっきりと区別のできる表記を
採用しました。この工夫により、拗音カ
ナは基本的に反り舌音および *ü* 介音の
ある音節に限定されるので、舌面音と *i*
介音がより適切な表記で発音できます。
ある地図帳に、長江 が、チャンチャン

意味論と語用論の接点からみる 話し言葉の研究

許夏玲 著 A5判 ■ 2400円

ことばの散歩道Ⅱ

日本語と中国語 58話

上野恵司 著 四六判 ■ 1680円

と書かれていて驚いたことがあります。
第一表に従えば、長江 は、チャアン
ジアンという表記になります。加えて
「*ong*」に接続する反り舌音声母には、ヂォ
／チォ／シォという系列を立てて、「中国」
はヂォングオと表記し、ピンインの綴り
も想起できるように配慮しました。

このように、カタカナ表記として許容
される適性を考慮しつつも通常の外来語
表記からするとやや逸脱、あるいは過剰
な表記法を敢えて採用しているのは、読
者にその表記がある意図をもつてなされ
ていることを想起してほしいからだと
す。ふだん使わないヂォというカナで目
を惹いて、反り舌音声母であることに注
意を促しているわけです。なお中国語を

知らない一般読者は、ヂォンはジョンと
読むことを確かめたうえで採用しました。
このような工夫により、日本人学習者に
とって区別しにくい有気音と無気音、*l*
と *r*、*f* と *h*、反り舌音声母、音節末の
n と *ng* が、特別な記号や混ぜ書きを使
わずに、最長でも一音節につきカタカナ
五文字で表記し分けられるようになって
います。

しかしこうした工夫は、一般読者を対
象とした日本語の文脈の中に外来語とし
て置いてみると、過剰かつ奇妙な表記に
感じられることもまた事実です。学会発
表から数ヶ月後、世界の鉄道の風景を紹
介したテレビの人気番組の製作スタッフ
から、台湾一周の旅のDVDを制作する

言語理論の観点から言語表現の意味機能と使用実態を
考察し、また日本語と中国語の対照研究の観点からそ
の使用背景となる日本語母語話者と中国語母語話者と
の言語行動の共通点と相違点を分析する。

ことばを楽しむ。日本語・漢語・中国語……。寄り道の
多い日中言語文化比較エッセイ。「準」と「准」どう違
う？／「君子は豹変す」どう変わる？……他、全58話。

白帝社

※価格は税込

〒171-0014 東京都豊島区池袋2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

にあたり、ナレーションに含まれる地名の発音をチェックして欲しいという依頼がありました。ナレーション担当のかたは、中国語を知らないのでカタカナを素直に日本語で読みます、ということでした。ナレーションは音声だけが視聴者の耳に届きますから、中国語地名をできるだけ違和感のない日本語の発音に置き換えなくてはなりません。

当初は学会で発表した拙案のシステムを使えば、正確な中国語音に近く読んでいただけるはず、と思ったのですが、日本語の文中にこの精密表記でカタカナ地名を置いてみると、却ってずいぶん読みにくくなってしまふことがわかり、送っていたいたナレーション原稿のコピーを朗読しながら、自然に読める簡略表記に調整しなければなりません。加えて若干の慣用の読みかたや、台湾の中国語の発音特性（二水をアルシユイではなくアースイとするなど）も考慮に入れま

した。
一般的に言って、カタカナ表記の外來語は、原語がどのような音声的特徴や区

別を持つているかに関わらず、ひとたび日本語の中に置かれたなら、日本語の音体系を用いて読まれ、発音されます。つまり日本語の中でカタカナ表記の中国語が出てきても、そこだけを中国語音に切り替えて読むのは、（読み手がよほど中国語に習熟していない限り）逆に不自然なことです。中国語に習熟した読み手を想定して、中国語音に復元可能な精密な表記を追求してみたところで、日本語としてなんと読めばよいのかわからないようなカタカナの羅列では、読者の便宜どころか混乱を招くだけであり、わざわざ表記する意味がありません。

日本語のなかで外來語として現代中国語音を扱うための、出版向けの簡略表記版が必要だと思っていたところに、折よく福嶋亮大さんから、ガイドライン作成の提案と協力の依頼がありました。そこで第一表をもとに現代日本語の外來語表記にあわせた音節表を作成していただきました。便宜的にこちらを第二表「出版用（簡略表記）」と呼ぶことにします。第二表では、次のような方針のもとに調

整を行ない、再編しました。

「1」いわゆる「捨てカナ」は使わない。小さな母音カナは、ティ／デイとトゥ／ドウに限定。ジ／ヂおよびズ／ヅは、日本語表記の慣用に従い、ジとズに統一。「2」慣用の表記が定着しているものについては、できるだけ尊重して表記の無用な多様化による混乱を避ける。

「3」単母音韻母は一律「音引き」で表記する。

有気音と無気音を清濁の違いで表記し分けることは第一表を踏襲しましたが、l と r、f と h、反り舌音と舌面音、音節末の n と ng の区別はあきらめざるを得ませんでした。また「縦書きのルビ」に使用される場合を考慮して、慣用にあわせ、単母音音節は音引きで表記することにしました。縦ルビでは小さな母音カナが使えないため、通常の母音カナに置き換えられてしまう場合が少なくありません。そうすると第一表では小さい母音ガナを使ってシユイと表記したいが、水、シユイと同じ表記になってしまいますので、第二表ではやむを得ず、徐

は「3」の方針に従いシユーとしました。縦ルビでは分かち書きができませんから、音引きを使わないと、場合によってはカナの羅列となつてしまい、どこまでがひとつの漢字に相当する音のまとまりなのか分かりにくくなります。音引きがあれば、そこが音の末尾であることが一目瞭然です。単母音韻母の一部に、音引きではなくウやイを使つて表記することも検討しましたが、主「ジユウや、苦クウはいいとしても、胡はフーがすでに慣用として定着しており、また、鶏ジイや皮ピイにはやや抵抗を感じ、李にはリーが慣用として定着していることから、単母音韻母は一律、音引きを使った単純な表記を採用しました。

なおこのガイドラインは、できるかぎり適切な表記になるように考慮した目安であり、正誤の判断基準に供するものではありません。人名や商標では、商業的な効果を狙つた表記上の工夫ももちろんあると思います。たとえば、章子怡はチャンツイイーがすでに定着しています。これをチャアンヅイイー（第一表による）と

表記するのが正しい、あるいはジャンズイー（第二表による）に改めよ、ということではありません。

そもそも中国語は、漢字で表記する言語であるのに、現代中国語音をカタカナで表記することに、どれほどの意味があるのでしょうか。私は現代中国語音をカタカナで表記するのに決して積極的ではありません。中国語の教室ではピンインに習熟し、正しい中国語音を習得するために、カタカナによる表音をすべきではない、という考えかたには、中国語教師のひとりとして、もちろん賛成です。そして英語由来のカタカナ外来語が氾濫している日本語に、さらに中国語由来のカタカナ語がみだりに加わるのは好ましくないと考えています。漢字を中心としてみた場合にも、いかに現代中国語による「正しい」発音を表記していようと、呉音・漢音と異なる数種類の音読みに加えて、さまざまな訓読みのある日本の漢字に、新たに不安定な読音を増やすことは、決して日本語を豊かにすることにはつながらないと思うからです。

それなのになぜ、現代中国語音のカタカナ表記法を研究して提案するのか。それは、国際交流が活発化した現代社会において、とくに名前や地名などの表記や登録で中国語音のカタカナ表記を必要としている人がいて、日本語として中国語音をどのように受けとめて表記すべきか、という切実な問題が発生しているにもかかわらず、場当たり的で不見識な表記による混乱が累積されていくのを中国語の研究者のひとりとして見るに堪えかねたからにすぎません。いわば「文化的雪かき」をしただけのことです。降り積もった雪に、通行するひとが足をとられて立往生したり転んだりしないよう、少しでも早く起きて雪かきをしておくのは、雪国に育つた私にとっては、何げない基本的な心がけでした。

（いけだたくみ 京都大学人文科学研究所）

「現代中国語カタカナ発音表記ガイドライン」（第一表・第二表）は、平凡社ウェブサイトにて近日公開予定です。